

〈論文〉

産出方法の違いによる形容表現の使用状況

— 英語母語の学習者と日本語母語話者の比較 —

木下 謙朗

キーワード：形容表現、話しことば、書きことば、日本語学習者、日本語母語話者

1. はじめに

本論文は英語を母語とする日本語学習者6名(以下、ENS)、日本語母語話者6名(以下、JNS)に同一のトピックを提示し、二つの方法(話す・書く)による産出物に表出した形容表現の使用状況について比較・分析したものである。

形容詞⁽¹⁾は日本語教育における多くの初級教科書で、早い段階で導入されているにもかかわらず、上級レベルといわれる程度にまで達しても、形態的誤りや語彙的誤り⁽²⁾などの誤用⁽³⁾がみられる場合がある。これらの誤用を産出するメカニズムを探る中間言語研究や習得研究は進み、その成果を日本語教材に応用したものも出版されている⁽⁴⁾。しかし、同じ形容詞や形容表現を何度も使用することにより、学習者の産出した日本語が文法的には間違いではないが、幼稚な印象を与えてしまうことがある。日本語学習者の日本語力をJNSに近づけるということを考えると、この点を解明するための研究が必要であるが、現在ではほとんどみられない。本研究の目的は、JNSにおける形容表現の使用実態を明らかにし、ENSの形容表現の使用実態と比較・対照することで、ENSの形容表現をJNSの使用実態に近づけるための方策に示唆を与えることにある。

2. 先行研究と研究課題

形容詞の使用状況についての先行研究には木下(2007, 2009b)、曹・仁科(2006a, b)などがある。木下(2007)では、JNSと学習者(英語、中国語、韓国語をそれぞれ母語とする日本語学習者)の話しことばに表出したナ形容詞「～的」の使用状況について比較している。その結果、「A的なB」とした場合に、「A」はJNS、「B」は学習者のほうが多様性は高いことから、学習者は「～的」と共起する様々な語彙のある特定の「～的」で形容するのに対し、JNSは共起する語彙を様々な「～的」を用いて形容している傾向があると述べている。また、木下(2009b)では、JNS

と学習者（中国語、韓国語をそれぞれ母語とする日本語学習者）が、同一のトピックについて書いたものに含まれる形容表現について比較している。その結果、単純形容表現の使用状況は学習者と JNS で違いはなかったが、複合形容表現⁽⁵⁾は学習者よりも JNS の使用が多くみられたとある。曹・仁科（2006a）では JNS の作文に表出した形容詞について、曹・仁科（2006b）では中国語を母語とする日本語学習者の作文に表出した形容詞について、イ形容詞とナ形容詞が修飾部と述部でそれぞれどのくらい表出しているのかを調査している。その結果、イ形容詞についてみると学習者は修飾部で約 46% の使用があるのに対し、JNS は約 20% であった。また、ナ形容詞においては修飾部での使用が学習者は約 64% であるのに対し、JNS は約 51% となっており、イ形容詞とナ形容詞に共通して JNS より学習者のほうが修飾部での使用が多いと報告されている。

いずれにしても、産出方法が書きことば、もしくは話しことばのどちらかについての報告である。そこで、日本語の形容表現の使用状況について考える際、話しことばと書きことばの産出方法の違いにより異なるのか。また、JNS と学習者（本稿では ENS）で形容表現の使用状況は異なるのか否かについて明らかにする必要があると感じた。これらを明らかにするため、以下のような手順で調査を行った。

3. 形容表現と調査方法

3.1 形容表現

本論では ENS と JNS が使用する形容表現の違いについて比較・対照をするが、その際に形容表現について定義しておく必要がある。

本論での「形容表現」とは「形容詞」と「複合形容表現」を使用して形容するものとする。

「形容詞」とは、橋本文法を基にした学校文法でいう形容詞と形容動詞のことであるが、そのうち打消しの意味をあらわす補助形容詞「ない」は形容詞とせず、「大きな」「小さな」などの語は連体詞とし、形容詞の活用とはみなさない。

一方、「複合形容表現」とは形容詞を単独で使用せず、名詞などに「～らしい（『日本語能力試験出題基準』（以下、『基準』）：3級）」、「～っぽい（『基準』：2級）」、「～やすい（『基準』：3級）」、「～にくい（『基準』：3級）」、「～づらい（『基準』：2級）」などの接尾語を付け加え形容詞化し、形容するものとする⁽⁶⁾。また、比喩的な意味を表す「～ような（『基準』：3級）」、「～みたいな（『基準』：3級）」を使用し形容している表現も複合形容表現とする。

また、本論での豊かさとは、形容詞を使用して形容する場合においても同じ形容詞を何度も使用せず、さまざまな形容詞を使用し多様性⁽⁷⁾が高いこと、また、複合形容表現を多く使用することをいう。

3.2 調査方法

本調査は、関東にある大学・大学院に在籍している ENS（各 6 名）と JNS を対象に、同一のトピックについて、二つの方法（話す・書く）で産出したものから形容表現を抽出し分析した。ENS

は日本語教育機関で約 1,000 時間以上の日本語教育を受けたものとし、「Simple Performance-Oriented Test (SPOT テスト)」⁽⁸⁾ のバージョン 3 で 65～85% の得点を占める学習者に限定し、レベルを統一した。

産出方法のうち「話す」はインタビューを行い、「書く」は作文を書く課題とし、それぞれ二つのトピック（トピック 1：自国の行事や祝い事の紹介、トピック 2：喫煙の規制についての意見）について産出させた。

産出内容は、自分の身の回りにあることについての紹介文（トピック 1）と、現代社会で問題になっている意見文（トピック 2）の二つにしたが、紹介文と意見文では産出内容やスタイルの違いにより、使用する形容表現が違っていると予想され、産出内容の違いによる形容表現の仕方のように分析することもできる⁽⁹⁾。しかし、トピックを一つにした場合、使用する形容詞が偏ってしまう恐れがあるため、また、本調査の目的でもある対象者間（ENS と JNS）における形容表現の使用状況、産出方法の違いにおける形容表現の使用状況を明らかにするため、偏りがないようにあえて紹介文と意見文の二つのトピックを選択した。

調査は先にインタビューを行い、1～2 週間後に作文を書かせた。どちらも前述した二つのトピックについてであったが、瞬時に産出した際、どのような形容表現を使用するかを明らかにしたかったため、内容はそれぞれ調査開始時に提示することとした。

産出方法が「話す」の場合、インタビューにより誘導してしまうことが予想されたので、トピックカード⁽¹⁰⁾を渡し、2～3 分で自分の意見を述べた後、インタビュアーが質問をする形式をとった。また、「書く」の場合トピックは作業を行う直前に提示し、辞書などは使用しないよう指示した。

以上のような手続きで回収した産出物を、形態素解析フリーソフト「茶釜 version 2.1」を用いて単語に自動的に品詞タグを付与し、人手により見直しと修正を行った。その上で、それぞれの資料から形容表現を抽出し、比較・対照した。「形容表現の豊かさ」を比較・対照する際、異なり語数を用いる方法も考えられるが、同じ形容詞を何度も使用することにより豊かさが薄れてしまうことを考慮すると、形容詞の多様性についても述べる必要があると思われる。そこで、複合形容表現については延べ語数を用いるが、形容詞については延べ語数・異なり語数と多様性について比較することとする。

3.3 形容詞の使用用法

形容詞の使用用法については橋本・青山（1992）の三つの用法（終止用法・連体用法・連用用法）を参考にする。そのなかで、「おいしいんです」、「元気なんです」のような「形容詞+んです」の「ん（の）」を日本語学では準体助詞と扱う場合もある。その際は「んです」に接続する形容詞の活用形態は「連体形」ということになる。しかし、日本語教育の現場では「んです」は 1 語として導入・提示されることが多い。山内（2009）では、「んです」が「のだ」の変化形 1 語であると認定し、その品詞は助動詞とするべきだと提案している。そこで本論では「のだ」を助動詞（相当）と捉え（『新版日本語教育事典』p.189）、「おいしい料理」、「元気な子供」のような連体用法と区別すべきだと考えるため、本論では「形容詞+んです」を終止用法として取り扱う。

橋本・青山（1992）の三用法を参考にすると述べたが、この名称を使用すると混乱を招く恐れがある。それは「元気なんです」のように、形容詞の活用形態は連体形であるにもかかわらず、日本語教育的に分類すると終止形となるからである⁽¹⁾。そこで、用語と実際の形態の混乱を避けるため、本論では上で述べた用法と表出する位置を考慮して、“終止用法”を「述部用法」、 “連体用法”を「修飾部用法」、 “連用用法”はそのまま「連用用法」として、論を進めることとする。

4. 結果と考察

ENS と JNS の話しことばと書きことばに表出した形容表現のうち、形容詞と複合形容表現がどのくらいの割合で使用されているのか分析する。ENS の話しことばに使用された形容表現は延べ 193 例（うち形容詞は 187 例）、書きことばに使用された形容表現は延べ 207 例（うち形容詞は 180 例）であった。また、JNS の話しことばに使用された形容表現は延べ 197 例（うち形容詞は 166 例）、書きことばに使用された形容表現は延べ 141 例（うち形容詞は 104 例）であった。

4.1 量的にみた形容表現

本項では形容表現の使用状況を①産出方法、②ENS と JNS、③全体的、についてそれぞれ比較する。

ENS と JNS が使用する形容表現の使用状況を表 1 に示し、各一人当たりの使用状況を図 1 に示す。

表 1 ENS と JNS 形容表現の表出状況

(形容詞：延べ語数/異なり語数)

	形 容 詞	複合形容表現	合 計
JNS (書)	104/45 (73.80%)	37 (26.20%)	141 (100.0%)
JNS (話)	166/46 (84.30%)	31 (15.70%)	197 (100.0%)
ENS (書)	180/58 (87.00%)	27 (13.00%)	207 (100.0%)
ENS (話)	187/54 (96.90%)	6 (3.10%)	193 (100.0%)

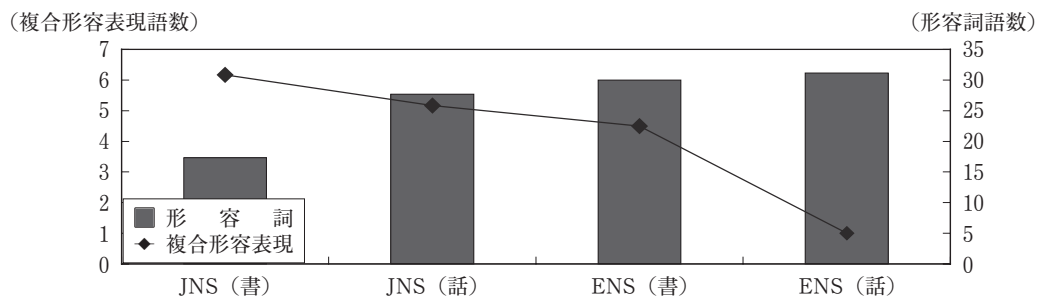


図 1 ENS と JNS の一人当たり形容表現の表出状況

① 産出方法の違い

表と図から、ENSにおける形容表現の使用数は【書きことば > 話しことば】であるのに対し、JNSは【話しことば > 書きことば】となり、両者は同一のトピックであるにも関わらず、産出方法により形容表現の使用数が異なっていることが明らかとなった。

また、形容表現のうち、形容詞と複合形容表現それぞれの使用状況は以下のものであった。

形容詞

ENS：書きことば < 話しことば JNS：書きことば < 話しことば

複合形容表現

ENS：書きことば > 話しことば JNS：書きことば > 話しことば

(1) その日にほんとに幸せな感じで、ほんとに自由よかった。

(英語母語話者1 課題①・話)

(2) その間におぼうさん(神父のような人物)に死者のたましいに安らぎを与えるお経というものを読んでもらいます。

(日本語母語話者3 課題①・書)

このように、形容詞と複合形容表現に分類した場合、それぞれENSとJNSでは共通した使用状況であった。つまり、話しことばでは例(1)のように形容詞が多く使用され、書きことばでは例(2)のように複合形容表現が多く使用されるのである。形容詞と複合形容表現を使用する割合を示した図2からも、それは明らかである。

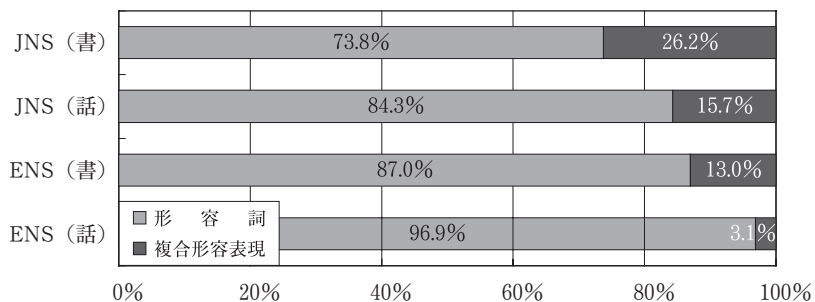


図2 形容表現の使用状況 (割合)

② ENSとJNSの違い

次に、ENSとJNSが使用する形容表現の使用状況を比較する。表出数においては表1から以下のことがいえる。

話しことば：【ENS ≤ JNS】

書きことば：【ENS > JNS】

話しことばにおける形容表現数は両者に相違はないが、書きことばにおいては60例以上の差があり、使用数からみるとENSのほうが豊富な形容表現をしていると考えられる。形容詞と複合形容表現に分類すると、前者は産出方法に関係なくENSのほうが多く使用しているが、後者はJNS

の方が多く使用している（延べ・異なり共に）。このことから、書きことばにおいて ENS の形容表現が多いのは形容詞のためだということがわかる。では、形容表現数が多いということは、豊かな形容表現が行われていると考えられるであろうか。そこで、どの程度の種類の形容詞を使用しているのかを比較する際の指針となる、形容詞の多様性（参考として頻度も）を下の表 2 に示す。

表 2 ENS と JNS 形容詞の多様性と頻度

	JNS (書)	JNS (話)	ENS (書)	ENS (話)
多様性	0.4327	0.2771	0.3222	0.2888
頻度	2.3111	3.6087	3.1034	3.4630

両者の書きことばにおける形容詞の多様性をみると（網掛け部）、JNS のほうが高く、さまざまな形容詞を使用し、ある特定の形容詞を繰り返し使用することが少ないということがわかる。以下はある ENS の作文の一部を抜粋したものである。

- (3) どうしてたばこをすうのはいい考えと思うたいていの人はクラスか仕事のあとでたばこをすったらもっとリラックスできると言うけど、もっと体にいいしゅみとふだんがある。スポーツをするとかテレビゲームをするほうがいい。(英語母語話者 2 課題②・書)

わずか 2 文からなる例であるが、「いい（『基準』：4 級）」を 3 度も使用している。ENS は JNS に比べ形容詞を多く使用しているが（延べ・異なり共に）、例(3)のように基本的な形容詞を何度も使用することにより、幼稚な印象を与えてしまうのではないかと推測できる。

③ 全体的な比較

最後に、①と②で述べた四つ（ENS と JNS の話しことばと書きことば）に表出した形容表現の使用状況について、全体的に比較する。

表 1 と図 1 から、形容表現の使用が多い順に並べると以下のものであった。

ENS (書きことば) > JNS (話しことば) > ENS (話しことば) > JNS (書きことば)

そのうち、形容表現のうち複合形容表現の使用が（割合においても同様）高い順に並べると以下のようなになる。

JNS (書きことば) > JNS (話しことば) > ENS (書きことば) > ENS (話しことば)

また、形容表現のうち形容詞の使用が少ない順（延べ語数）に並べると以下のようなになる。

JNS (書きことば) < JNS (話しことば) < ENS (書きことば) < ENS (話しことば)

①でも述べたが、ENS と JNS に共通して瞬時に産出しなければならない「話しことば」よりも、産出時に推敲する時間を確保できる「書きことば」において、複雑な形容表現である複合形容表現を多く使用することがわかった。また、ENS は JNS のように複合形容表現を多く使用することができず、ENS の書きことばで使用される複合形容表現は、JNS の話しことばで使用されるそれよりも低

いことが明らかとなった。また、話しことばにおいて両者が使用する複合形容表現の違いについて t 検定を行った結果、ENS よりも JNS の方が有意に多く使用していた ($t(10) = -2.879, p < .05$)。一方、書きことばにおいて両者が使用する形容詞の違いについて t 検定を行った結果、JNS よりも ENS の方が有意に多く使用していた ($t(10) = -2.350, p < .05$)。それに加え、形容詞と複合形容表現の使用数には強い負の相関がみられ ($r = -0.724$)、形容詞を多く使用する ENS は複合形容表現の使用数が少ないが、形容詞の使用が少ない JNS は複合形容表現の使用が多いことが明らかとなった。

4.2 形容詞の難易度

前項で、ENS が使用する形容詞は延べ語数・異なり語数共に JNS よりも多かったが、多様性は低いことがわかった。このように ENS が多く使用する形容詞の難易度はどのようなものが多いのだろうか。ENS と JNS の話しことばと書きことばに表出した形容詞を、『基準』に照らし合わせ表 3 に示し、その割合を図 3 に示す。

表 3 『基準』からみた ENS と JNS 形容詞の難易度

(表出数 (割合))

	4 級	3 級	2 級	1 級	級外	合計
JNS (書)	60 (57.7%)	25 (24.0%)	11 (10.6%)	0 (0.0%)	8 (7.7%)	104 (100.0%)
JNS (話)	133 (80.1%)	16 (9.6%)	12 (7.2%)	2 (1.2%)	3 (1.8%)	166 (100.0%)
ENS (書)	132 (73.3%)	31 (17.2%)	12 (6.7%)	0 (0.0%)	5 (2.8%)	180 (100.0%)
ENS (話)	137 (73.3%)	41 (21.9%)	6 (3.2%)	0 (0.0%)	3 (1.6%)	187 (100.0%)

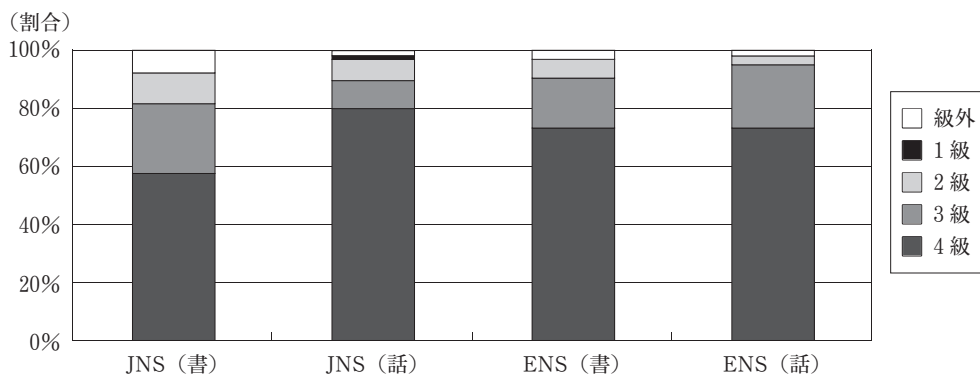


図 3 『基準』からみた ENS と JNS 形容詞の難易度 (割合)

表と図から、3, 4 級レベルの語彙使用が約 80% を超えており、大部分を占めていることがわかる。一方、1, 2 級レベルと級外の形容詞の使用は両者に共通して少ないが、ENS よりも JNS、また、話しことばよりも書きことばで多く使用されていることがわかる。難易度の高い語彙 (2 級以上) の使用が多い順に並べると以下ようになる。

JNS (書きことば) > JNS (話しことば) > ENS (書きことば) > ENS (話しことば)

この順序と形容詞の表出数をみると、JNS は表出数が少ないが難易度の高い形容詞を使用するが、ENS は難易度の低い形容詞を多く使用する傾向があることがわかる。

5. ま と め

本論では、ENS と JNS が使用する形容表現のうち、形容詞を使用して形容するものと、複合形容表現を使用して形容するものについて、量的・質的に比較を行った。

その結果、以下のようなことが明らかとなった。

産出方法による違い

ENS：形容表現の表出数はどちらの産出方法においてもほとんど変わらないが、複合形容表現の使用は書きことばで多く使用され、話しことばではほとんど使用されなかった。

JNS：書きことばよりも話しことばで形容表現の使用数が多く、産出方法の違いにより複合形容表現の使用数はほとんど変わらないが、形容詞の使用数は異なっていた。

ENS と JNS の違い

形容詞：話しことばと書きことばに共通して、JNS よりも ENS のほうが多く使用していた。しかし、形容詞の多様性が低く、難易度の低い形容詞を多用していた。また、書きことばにおいて、ENS の方が有意に形容詞を多く使用していた。

複合形容表現：話しことばと書きことばに共通して、ENS よりも JNS のほうが多く使用しており、話しことばにおいては、それが有意であった。

以上の結果から、ENS は形容表現の使用数は多いが、単純に形容をする形容詞の使用が多く、その上、難易度の低い形容詞を何度も使用すること。また、JNS のように複合形容表現を使用できておらず、JNS のように豊かな形容表現ができていないことが明らかとなった。このような形容表現の使用状況は、ENS の産出する日本語が幼稚な印象を与えてしまう要因の一つだと考えられるだろう。日本語教育の現場では、形容詞を初級の早い段階で導入し、定着・運用できるように指導をしていることが多い。その結果、形容詞を使用して形容表現を行うことはできるが、JNS のように複合形容表現を使用できず、難易度の低い形容詞を何度も使用してしまう。学習者（本論では ENS）が産出する日本語を JNS のように豊かな形容表現に近づけるためには、単純に形容詞を使用するだけでなく、複合形容表現を使用することにより、JNS の形容表現の使用実態に近づき、豊かな形容表現が運用できるようになるのではないかという示唆が得られた。

〈注〉

- (1) 本論は日本語教育学の見地に立って論を進めるため、伝統的な国語学でいう形容詞をイ形容詞、形容動詞をナ形容詞とし、形容詞とする場合は両者を含むものとする。
- (2) 形態的誤りとは活用語尾に関する誤用であり、誤りは基本的に語尾の部分に起きる。また、語彙的誤

りとは語彙自身の習得が不完全なところから生じる誤用であり、誤りの起きる範囲が語尾だけでなく語幹など語彙全体に及んでいる。

- (3) 学習者の表出する「不完全」な言語は一般的に「誤用」とみなされるが、中間言語の考え方では学習者自身が作りあげた独自の文法体系に基づいて「文法的に正しく」産出されたものということになり、「誤用」という考え方に疑問がある(迫田 1998)。筆者も学習者の産出した「不完全」な言語を「誤用」とすることに疑問を感じているが、本稿では一般的に「正用」とされているものと区別をしやすいするために、「誤用」という用語を使用する。
- (4) 『J. Bridge』(小山 2002) など。
- (5) 木下(2009b)では、形容詞を単独で使用する表現を「単純形容表現」とし、「～ような」、「～みたいな」が付いた複合的な形容表現を「複合形容表現」としている。
- (6) 森田(1980, 2008)では、形容詞化する接尾辞として、「～にくい、～づらい、～やすい、～かわしい、～こい」などが挙げられており、本論ではそのなかで『基準』に準拠している五つを選択した。
- (7) ここでいう多様性とは延べ語数における異なり語数の割合のことで、値が高ければ高いほど多様性が高い(さまざまな形容詞を使用している)ことを示している。
- (8) 「SPOT テスト」については小林他(1996)を参照。
- (9) 実際、形容詞は ENS と JNS, 産出方法に関わらず、トピック 1 よりも 2 の意見文で多く使用されていた。
- (10) 「話す」と「書く」で産出のしかた(書いてください、述べてください等)、ENS と JNS への言い回しは異なっているが、内容は同じである。以下は ENS へのインタビュー課題である。

・インタビュー課題 1

あなたの国にある行事やお祭り、おいおいごとなどをひとつえらんで、日本人の学生や大学の先生たちに日本語で 2~3 分で紹介してください。

・インタビュー課題 2

今、日本ではたばこのことが問題になっています。ある人は言います。「会社やレストラン、バスや電車など公共の場所ではたばこを吸えないよう規制を作るべきだ。また、たばこのコマmercialは子どもに悪い影響を与えるから、テレビで放送できないようにするべきだ。」

一方、次のように言う人もいます。「規則を作って禁止するのはおかしい。だれにもたばこを吸う権利があるはずだ。」

あなたはどのように思いますか。たばこについてのあなたの意見を 2~3 分で述べてください。

- (11) 形態素解析フリーソフト「茶釜 version 2.1」で「元気なんです」を解析すると、
元気：名詞—形容動詞語幹，な：助動詞，ん：名詞—非自立—一般，です：助動詞
となる。

参考文献

- 木下謙朗(2007)「日本語学習者の日本語力はどこまで母語話者に近づくか — 形容詞の活用形態と『～的』の使用について —」2008 年度日本語教育学会秋季大会予稿集 125-130 日本語教育学会
- (2009a)「書きことばにおける形容詞の使用状況 — 学習者と母語話者の比較 —」『明海日本語』14 号 37-48 明海大学日本語学会
- (2009b)「書きことばにおける形容詞の使用状況 — 複合的な形容表現に注目して —」『明海対照言語学論集』2008 年度 NO.9 43-50 明海大学大学院応用言語学研究所
- 国際交流基金・日本国際教育協会(2004)『日本語能力試験出題基準(改訂版第 2 刷)』凡人社
- 国立国語研究所(2001)『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース ver. 2』CD-ROM 版

- 小林典子・フォード丹羽順子・山元哲史（1996）「日本語能力の新しい測定法 [SPOT]」『世界の日本語教育』6号 201-218
- 迫田久美子（1998）『中間言語研究——日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得——』溪水社
- 曹紅荃・仁科喜久子（2006a）「中国人学習者の産出した共起表現から見る語彙習得の問題——作文対訳データベースの活用——」第56回第二言語習得研究会配布資料
- 曹紅荃・仁科喜久子（2006b）「中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言——名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について——」『日本語教育』130号 日本語教育学会
- 日本語教育学会編（2005）『新版 日本語教育事典』大修館書店
- 橋本進吉（1948）『橋本進吉博士著作集 第二冊 国語法研究』岩波書店
- 橋本三奈子・青山文啓（1992）「形容詞の三つの用法：終止，連体，連用」『計量国語学』18巻 5号 201-204 計量国語学会
- 飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
- 森田良行（1980）「日本語の形容詞について」『講座 日本語教育』第16分冊 108-124 早稲田大学語学教育研究所
- （2008）『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版
- 文部省（1947）『中等文法口語』三省堂
- 山内博之（2009）「形態素解析に関する提案——日本語教育の視点から——」『代表制を有する書き言葉コーパスを利用した日本語教育研究』特定領域研究「日本語コーパス」平成19年度研究成果報告書 84-93